いきいき行田人

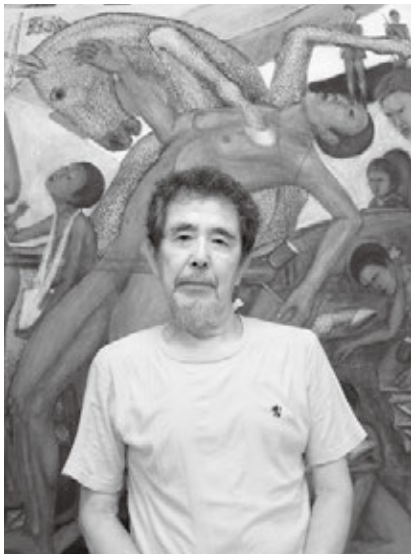
キャンバスに描く「非戦」のメッセージ

面高春海さん（77歳・城西）

今月は、終戦直後の旧満州（現在の中国東北部）での実体験を油彩画に描き起こし、独立美術協会が主催する独立展で過去13回入選した実績を持つ面高春海さんを紹介します。

昭和11年、面高さんは太平洋戦争中の旧満州で生まれました。戦時中とはいえ、戦闘機が空を飛ぶことも食糧難に陥ることもない土地で暮らしていた少年の生活が、ある日一変。日本の敗戦の色が濃くなった昭和20年8月、旧満州にソ連軍が侵攻してきたのです。泥やほこりにまみれ、首から食器代わりの空き缶を下げ、水や食べ物を求めながら逃げてくる日本人の姿を目にしたとき、当時9歳だった面高さんは大きな衝撃を受けました。「敗戦するということはこんなに悲惨なことなのか」幼心に刻み込まれた戦争の恐ろしさが、今も昨日のことのように目に浮かぶそうです。

昭和21年に日本へ引き上げ、その後は会社員として平穏な日々を過ごしました。しかし「あの光景を絵に残したい」との思いが強まり、定年を3年後に控えた57歳のとき、東京の美術専門学校へ入学。仕事と専門学校を両立する生活が始まったのです。そして、専門学校に入学して3年目、初めて出展した独立展で見事入選し、現在のスタイルを確立していきました。退職後は、63歳から毎年8月にグループ展や個展を開催し、今年の8月には行田で初の個展を開くなど、画家として充実したセカンドライフを送っています。



「世界のどこかで（生きる）」、「世界のどこかで（戦車が来た日）」のいずれかをタイトルに付けた作品はどれも大作ばかり。中には縦約190センチメートル、横約320センチメートルの巨大なものもあります。銃を持ったソ連軍から逃げる女性や子ども、物売りをする少年など、テーマは一貫して、苦しい状況にありながら必死に生き延びようとする人々を描いているそうです。1枚の絵のために、パソコンを使って描く構図は20枚以上で「一番大事にしているのは構図です。納得できるまで練り直します」と作品に対する情熱を語ります。

「もう二度と、悲惨な戦争を起こしてはならない」作品の数々は、そのメッセージを無言で訴えています。「人は生まれる時代を選べません。あの光景を目にしたのも何かの運命。平和の大切さを生涯伝え続けます」平和への願いを絵筆に託し、面高さんはこれからも「非戦」の思いを伝えていきます。

私の作品

◎皆さんの作品を募集しています。
◎俳句は毎月5日までにはがき・封書で広報広聴課へご応募ください。

俳句

本丸　諸貫　節子
朝顔の鉢をかかえて登校日

門井町　宮田　淑尚
ゆきずりに交す挨拶涼新た

須加　須加かづ江
目鼻つけ南瓜戸口に飾りけり

須加　栗原かね代
信濃路の夜空澄みたり天の川

荒木　高澤よね子
幼子のふくらむ知恵や鳳仙花

佐間　須永　節子
八十路過ぐずしりと肩に猛暑かな

城南　関口　操
亡き人の面影偲び盆の月

酒巻　風間ちま子
真夏日に折りし畳みし当票箱

谷郷　冨山　由喜
歩みより雲足速し夏の山

前谷　町田　貞子
オーシンが鳴いて青空高く見え

城西　佐藤ヤスコ
蓮咲いて古代の息吹戻り来し

斎条　中村　英子
朝顔の花のカーテン窓ごしに

桜町　吉岡　守子
終戦日あの日はくもり詔書きく

城南　町田　達男
利根の風受けて大の字ひるねかな

清水町　柳沢　紀子
久しぶり大きな富士に会えた夏

持田　二瓶　弘子
かき氷商い中の札揺れて

谷郷　吉野　六郎
朝顔に妻の朝顔合わせ見る

城西　新井　禮子
夏衣御霊（みたま）を胸に盆送り

押上町　竹内　蓉子
ききょう花一輪残り風にゆれ

（木島　斗川　監修）

はじめまして

平成24年10月生まれのおともだち

内田　野花（のか）ちゃん（桜町）
平成24年10月28日生まれ
父 義行さん 母 直美さん
「かわいさ金メダル☆」

根岸　翠風（みかぜ）ちゃん（南河原）
平成24年10月15日生まれ
父 哲也さん 母 由香さん
「みんなボクにメロメロ♡」

中村　奏太（かなた）ちゃん（忍）
平成24年10月25日生まれ
父 浩久さん 母 久美子さん
「我が家の宝物
元気に育ってね♪」

加藤　衣千花（いちか）ちゃん（持田）
平成24年10月28日生まれ
父 康晴さん 母 裕美さん
「おねえちゃんと
仲良くね♡」

大嶋　星士郎（せいしろう）ちゃん（野）
平成24年10月2日生まれ
父 周二さん 母 英美さん
「いつも幸せ♡
せいくんスマイル」

柿沼　大翔（はると）ちゃん（佐間）
平成24年10月8日生まれ
父 宏和さん 母 奈穂さん
「明るく元気に☆
大きくなあれ！」

平成24年12月生まれのお子さんを募集します

○10月1日㈫～31日㈭に電話またはEメールで広報広聴課広報広聴担当（内線318）
※応募要領は市ホームページをご覧ください。
○応募者多数の場合は、11月5日㈫午前11時から市役所201A会議室で公開抽選を行います。

ぎょうだの会社をクローズアップ!!

きねや足袋株式会社

伝統を継承した「こだわりの足袋づくり」

行田市は、「日本一の足袋のまち」として栄えていました。しかし、昭和30年を境に、洋装化が進み、足袋の生産は減少。廃業や被服生産に転換する足袋商店が相次ぎました。そんな中、きねや足袋株式会社は昭和7年の創業以来、伝統的な手法を継承し「こだわりの足袋」を世に送り出しています。

迫力あるミシンの音が響き渡る工場で、同社は年間約70万足を生産。足袋を履くさまざまなシーンに合わせ、色・素材・型がそれぞれ異なる多種多様な商品を製造しています。その数なんと100種類以上。「型が豊富にあって選びやすい」「履いたときのシルエットがきれい」「淡い色や柄などの足袋があっておしゃれ」と高い評価を受けているそうです。

創業当時から一切工程を変えず、上質な足袋を提供している同社。最も難しいとされるつま先部分を縫い合わせる工程では、創業時から稼動している「ドイツ式八方つま縫いミシン」が力を発揮します。独自の改良を加えたこのミシンと熟練された職人技を融合させることで、つま先部分がふっくらとした仕上りになり、抜群の履き心地を実現しています。三代目で営業部の中澤貴之さんは「私たちの商品が足袋愛好家の間では『匠の足袋』だと話題になったそうです。その評判を聞いて遠方から直接買いに来てくれるお客さまもいて、うれしい限りです」と笑顔を見せます。

国内での足袋の消費が落ち込む中、同社はビジネスの場を世界に広げようと計画中。「日本文化が浸透しつつあるフランスやイタリアなどのヨーロッパで、私たちの足袋を知ってもらいたい」と中澤さんは目を輝かせます。職人魂が吹き込まれた同社の足袋が異国の地で注目を集める日はすぐそこです。

会社プロフィール

代表取締役社長　中澤憲二
事業内容
足袋および地下足袋、祭り衣裳の製造販売

※このコーナーで紹介する会社を募集しています。特色ある業務を行っている会社の情報を広報広聴課広報広聴担当（内線318）までお寄せください。